
黒猫令嬢の気まぐれ

鈍色満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫令嬢の気まぐれ

【Nコード】

N0962Y

【作者名】

鈍色満月

【あらすじ】

「――我が国の誇る妖精姫。どうか私の妻になって頂きたい」

その言葉が発端であった。

主人公は金の波打つ髪に春の空の瞳を持つ、この度目出度く王子殿下に求婚された乙女――ではなく、彼女の親友である。

奇人変人の巣窟と名高い伯爵家の一人娘にして、周囲からは『黒猫令嬢』と渾名される彼女は親友に泣き付かれ、いやいや重い腰を上

げる。

目指すは親友の婚約破棄。

果たして黒猫令嬢は親友の願いを叶える事が出来るのか？

そもそもの発端（前書き）

初心者ですので、至らぬ所が多いと思いますが、お付き合いいただければ幸いです。

そもそもの発端

燦々と輝くシャンデリアの下、各々着飾った紳士淑女達。
磨かれ過ぎて鏡面の様に反射する、真っ白な大理石の床。
優雅な調べの音楽が流れる中、人々は手に手を取って広間の中央
へと足を踏み出す。

———そんな中、一際目立つ一組の男女の姿があった。

片や、波打つ金の髪と春の空の色と同じ色の瞳の乙女。
片や、肩にかからない程度の短い銀の髪に灰色の瞳の青年。

まるでおとぎ話の妖精王とその伴侶、又は神話の神々の様な麗しい姿に、広間中の者達の視線が知らず知らず二人に集う。

けれども二人は周囲の視線を物ともせず、華麗かつ軽快にステツ
プを踏み続ける。

漸く、一流の楽士達による旋律が終焉を迎える。

それまで手に手を取り合って踊っていた男女達は、礼儀正しく手を放し、相手にダンスの礼を述べて別れるのがマナーである。

———しかし。

お辞儀をするために手を離そうとした乙女の手を青年は離さない。

不審そうな眼差しの乙女に、青年は周囲の視線を集めたままにこりと綺麗な微笑みを浮かべる。

「我が王国の誇る金の妖精姫。どうか私の妻になって頂きたい」

古式ゆかしき求婚の礼に則り、伴侶に望む相手の右手に軽い口づけを落した銀髪灰眼の青年の言葉に、乙女は顔を青ざめさせた。

そもそもの発端（後書き）

そもそもの発端でした。

主人公、未だ出て来ておりません。

巷で噂の伯爵家

とある大陸のとある王国。

そしてその王国内にて、隣国と隣り合わせの地域に、領土を構える伯爵家があった。

王国の建国時代より、初代国王に仕え、その功績を認められた由緒正しき伯爵家。

度重なる戦の際にも多大なる功績を上げつつも、出世も名誉も固辞し、唯一途にひたすらに王国に仕える誉れ高き名家。

貴族達の身分制度である五等爵では第三位の地位であるにも関わらず、有事の際には国王からも意見を求められるという、栄誉ある一族。

というのは表向きの姿であり、その実態は奇人変人の巣窟。

——それがセラール伯爵家であった。

＊ ＊ ＊

「エステル、エステル、エステルー！！」

澄んだ春の空を思わせる瞳を涙で濡らし、部屋の主の許しも無く飛び込んで来たのは一人の少女。

波打つ月光を紡いだ様な金色の髪に、おとぎ話の妖精の様な可憐な容姿。

百人中、百人が美少女だと認める少女の名前はサラ。とある事情により、今この王国内にて最も有名な人物であった。

「……なあに、サラ。洗面所ならこの部屋を出てすぐ左よ」

緩慢な動きで振り返り、面倒くさそうに言い放ったのは、この部屋の主にしてセラール伯爵家の一人娘・エステル。

彼女の動きに合わせ、艶やかな黒髪がさり、と揺れる。

サラが金の髪に春の空の瞳を持つならば、エステルは艶やかな黒髪に夜の様な黒の瞳という、実に対照的な二人であった。

「うう……。相変わらず冷たいのね。生まれた時からの親友に、もう少しばかり優しくしてくれたって良いじゃないの」

「生まれた時からって、あんたとの付き合いは三歳からだだったと思うのだけど」

よよよ、とハンカチで両目を抑えるサラに、エステルが欠伸を噛み殺しながら答える。もう昼過ぎであるのにも関わらず、エステルはまだ寝間着を纏っていた。

「うう……。それよりもエステル。私に何か言う事があるんじゃない?」

「言う事? ……そうだねえ」

寝転がっていたソファから気怠気に身を起こし、エステルは三歳からの親友へと視線を寄越した。

「————取り敢えず、王子との婚約おめでとう」

「違うんだってば——!!」

————少女の悲鳴が、伯爵家の邸一杯に響き渡った。

巷で噂の伯爵家（後書き）

一人娘とは『姉妹のいない娘』という意味です。

親友は時の人

月光を紡いだような、波打つ金の髪。

春の空をそのまま映したような、澄んだ瞳。

可憐な容姿と儂げな雰囲気も相まって、社交界の間では『金の妖精姫』として名高い美少女。

——それがサラ・フィオーレである。

そんな彼女は一夜にして、この王国内で最も有名な乙女になっていた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「よかったじゃない、サラ。十年來の夢が叶って」

「十年來の夢って……。エステル、私の夢をなんだと思っているの？」

白いレースのついた手巾ハンカチに皺が出来るまで、ぎゅうぎゅうに握りしめたサラが涙目のままエステルを見つめ返す。

それに、エステルは眠たげに瞼をこすりながら答えた。

「ん？ だって昔“サラの夢は大きくなったら王子様と結婚する事！” って言ってたじゃない」

「いやあああ！ なんで、言った本人も忘れているようなことを覚えてるのよーー！！」

手巾を握りしめたまま、サラが絶叫する。

その姿に儂げで可憐な妖精姫の面影はどこにも見当たらない。

「第一、なんでそう嫌がるの？ 相手は王子だよ？ 玉の輿じゃないの」

「エステル……。貴女、相変わらず意地悪ね」

ぷう、と可愛らしく頬を膨らませながら、サラがエステルを睨む。

「あんた、まさかとは思うけど、まだアレの事が好きなの？」

「そうよ。悪い？」

ぷん、とそっぽを向いたまま、サラは答える。

「……強いて言わせてもらうなら、あんたの男の趣味は相変わらず最悪だわ」

「うるさい！」

『金の妖精姫』と謳われる親友の、長年の片思いの相手を知っているエステルとしてはそうとしか評しようがないのだが、その答えは親友の求めるものではなかったようだ。

顔を真っ赤にして睨んでくるサラを半眼で見据えたまま、エステルは面倒臭そうに髪を掻き揚げる。

「……そこまで知ってるのなら、どうして今回の件を私が受け入れないかもわかるでしょ」

——サラ・フィオーレは時の人。

何故なら、昨夜行われた舞踏会で王子に求婚されたから。

この国の乙女達が恋い焦がれる対象直々に求婚されて、断る娘がいるはずない。

そんな世間一般の人々の思惑に外れ、サラ本人は望まずに起きたこの出来事に、非常に困り切っていた。

「ねえ、お願いよ。私は王子と結婚したくないの。でも、でも誰にも相談できなくて」

舞踏会での返事自体は先延ばし出来たが、王子直々の求婚をたかが伯爵令嬢が断れるはずもない。

親に相談する事も出来ず、サラが頼った場所はどこだった。

———そんな親友の哀願に、エステルは何を考えているのかわからない黒の双眸を細めただけだった。

続・親友は時の人

くうあああ、と伯爵令嬢のあるまじき大口で、エステルは欠伸した。

彼女の垂らされたままの黒髪が、締め切られたカーテンの隙間から差し込んでくる日差しに照らされ、神秘的に煌めく。

エステルが無感情な眼差しでじっとこちらを見つめてきているのを感じたまま、サラは視線を逸らすことなく、その黒い双眸を見つめ返す。

「――ふわり、とその視線が和らいだのをサラは感じた。

「……話、聞いてあげる。だから、取り敢えず洗面台にいて瞼を冷やしてきなさい」

「本当!?!」

がぼっ、と勢い込んだサラに淡々とした視線を向けたまま、エステルは頷く。

「……うん。それより、昨日から何度か泣いたでしょう?　ここ、赤くなってる」

ここ、の所で自身の目元を指すと、サラの頬が羞恥で赤くなる。そのまま慌てながら部屋を飛び出して行ったサラの背を見るとともに追いかけながら、ソファの真横に置いてある鈴を振る。

「――親友が戻って来た頃には、普段着に着替えていなければならぬ。」

「それにしても、サラめ。また面倒事に巻き込まれて……」

エステルの愚痴が、彼女の他には誰もいない室内に零れる。

やがて鈴に呼ばれたメイド達がやってくるまで、エステルはぼうつと天井を見つめていた。

選択肢は……？

背の半ばまでのある長さの、艶めく濡れ羽色の髪。

煙る様な長い睫毛に覆われた、黒曜石の瞳。

何処か神秘的で気怠気な雰囲気を纏い、周囲を困惑させる事の多い彼女は『黒猫令嬢』と囁かれる。

——それがエステル・セラールである。

＊ ＊ ＊

「……つまり、これまでの話を纏めると、あんたは昨夜の舞踏会でこの国の王子に求婚された。それも第二王子に——王太子の方に」

この王国には二人の王子がいて、次の国王は兄王子ではなく弟王子に譲られる事が決まっている。

何故、兄王子の方ではなく弟の方に王位が譲られるのかについては王子達の母親の身分やら何やらと、色々と複雑な事情があるので今回は割愛しておく。

「取り敢えず、舞踏会の返事自体は保留という事で先延ばしにする事が出来たのだが、近いうちに返事をしなければならぬという事実が変わらない、と」

「うん、うん。そうなの」

ふわ、と小さな欠伸をした後、眠そうな眼差しでエステルはサラを見つめる。

寝間着から普段着に着替えたというのに、彼女の纏う眠そうな雰囲気は変わらない。

「今後のあんたの選択肢を述べるわよ。一つ、このまま王子の求婚を受け入れ、見事王太子妃と言う玉の輿に乗る」

「それだけは絶対に嫌！」

ぶるぶる、と高速で首を振るサラにエステルが面倒くさそうな表情になる。

『金の妖精姫』なんて、彼女が外向き用に作った分厚い猫の皮であるとよく解る姿だ。

「二つ、玉砕覚悟で王子の求婚を断り、国中から総スカンをくらう」

「それも嫌！」

「わがままだね、サラ」

「そういう問題じゃない！」

基本的に、身分が下の者が上の者（この場合は王子）の要求を断る事は、その要求の内容がよっぽどの物でない限り誉められる行為ではない。

「まあ、そんな事したら後々大変な事になるよね。なら、三つ目。

邪道としてはこの上無く邪道だけど、王太子に不慮の事故か何かに遭ってもらって表舞台から退場してもらおう」

「邪道過ぎるわ！ それって要するに、こう！ 言う事じゃないの！」

こう！ のところで、くいと右手の親指で自身の首をかき切る仕草をしてみせたサラに、エステルは舌打する。

「……普通の貴族のお嬢様はそんな仕草知らないのに」

「うるさい！ どうせ『妖精姫』なんて他人が勝手に作った幻想よ！」

春の空と同じ色の瞳が見る見る内に涙で潤む。

社交界での彼女の姿しか知らない者達が、今の彼女の姿を目にしたら目を剥く事間違い無しだ。

誰が知っているだろうか。「可憐」だの「儂い」だの言われているサラ・フィオーレが、とある一人のためだけに作られたサラ自身の努力の結果であると。

「私が『金の妖精姫』とか恥ずかしい渾名で呼ばれるまで、淑女として努力したのは少しでも“あの人”の側に立つても相応しい相手になるためのよ！ それなのに、それなのに“あの人”でもない相手に、例えば王子様だからって求婚されたって全然嬉しくないっ！」

「あ。恥ずかしいとか思ってたんだ」

「当たり前よ！ 自分が妖精とかいうキャラじゃないのは私が一番知っているものっ！！」

その台詞は、この場所が入念に人払いされた場所であるからこそサラが言える本音だろう。

儂さとかそう言った物が綺麗に消え失せた表情でサラが唸る様に呟く。

「私としてはなんであんたがそこまでアレに夢中になれるのかが知りたい所だけど……。いっその事、思い切ってアレに告白でも何でもしてみれば？ もしかしたら駆け落ちでもしてくれるかもよ？」

「……そんな事、出来ないわよ。お父様やお母様に迷惑になる上に、私にはそれほどの力はないもの……」

選択肢四は、ロマンチックでこそあるが、現実的に考えても実現不可能だ。

生まれた時からかしずかれて生きて来た貴族の令嬢が、それまでの生活を捨てて庶民の暮らしに馴染める筈が無い。それこそ、よっぽど特殊な環境下で育っていない限り。

サラは強いが、そう言った逞しさとは無縁な娘であると知っているからこそ、エステルはそれ以上何も言わなかった。

「ならこれしかないね。――王子の方から、今回の件は断ってもら」

涙で濡れた春の空の瞳が、不思議そうに瞬いた。

選択肢は……？（後書き）

サラ嬢は努力の人。

ほんとは『妖精姫』とかいうキャラじゃない。

思いついた手段

『黒猫令嬢』と周囲から囁かれる親友の言葉に、サラは何度も目を瞬かせた。

「王子の方から断って頂くって、求婚を避けるための手段としては最良だけど……そんなに簡単に断って頂けるなら最初から求婚なんてされないんじゃないかしら？」

「まあ、サラの言う事は最も。だけど、あんたが家の名誉も自身の名誉も傷つけずにこの件を無かった事にするには、王子本人からの拒絶が必要」

それに、とエステルはサラを見つめた。

「そもそも、王子があんたを名指ししたのは、あんたが王子の理想の結婚相手としての条件を全て満たしていたからだって」

「理想の結婚相手!？」

がたっ、と椅子から身を起こして立ち上がった親友に目で席に座る様に促しながら、エステルは言葉を紡ぐ。

「——見目麗しい、金の髪の可憐な乙女。性格は控えめで、でしゃばったりしないけど、芯のある気丈な子」

「は？」

「今までの第二王子の女性遍歴を探った挙句に出て来た、王子好みの女性像」

大勢の前での求婚、という力技に出たのはサラが初めてだが、理想の男性として国内の女達の間で人気の第二王子はこれまでに幾度

か浮き名を流していた。

そうして、王子とそう言った関係になった女性達の情報を統合し、出て来たのが以上の条件であったのだ。

「その法則で行くのなら、あんたは正しく王子のストライクゾーンだね」

「いやああああ!!」

びし!　　と言い放ったエステルの言葉に、サラが奇声を上げる。
彼女にしてみれば悪夢でしかないだろう。

王子と言えど、これまでに歯牙にもかけなかった相手に目をつけられる事になった最大の原因が、彼女が長年努力して作り上げて来た淑女としての自分であったのだから。

「いやよ、いやよ、ぜえつつたいにいや!　　只でさえ嫌だったのに、それ聞いてますます嫌になっちゃったじゃない!!」

「サラ……」

「それってつまり、王子が私の上っ面だけで好きになったって事じゃない!!　　確かに恋愛する上で顔は重要だとは思うけど、だからって……!」

ぐすぐす、と泣き出し始めた親友に手巾を渡すと、遠慮なく鼻をかまれた。

猫を被る必要が無いとは言え、今の姿を見て、この泣きべそをかいている娘が社交界の花である『金の妖精姫』サラ・フィオーレであると気付く者達がいるのであろうか。

「――……それだ」

「ひっく、なあに、どうしたのエステル？」

不意に、爛々と夜空の様な黒い瞳を輝かせ始めたエステルに、サラが怪訝な顔になる。

「ねえ、サラ。あんた、今回の求婚はなにがなんでも断りたいんでしょ？」

「ぐすっ、うん、うん、そうだよ」

「その願い、叶えて上げるわ」

「……………ほんと？」

目を真っ赤にさせ、瞼を赤く腫らしたサラが顔を上げる。

期待のこもった春の空の瞳に向けて、エステルは見る者を魅了する妖しい笑みを浮かべてみせた。

「……………ええ」

「どういう風の吹き回しか、訊いてみても良い？」

「単なる気まぐれよ。それ以上でもそれ以下でもないから気にしないで」

すんすん、と鼻を鳴らす親友の視線を受けながら、エステルは窓の硝子戸を通して王城の方へと挑む様な視線を投げかけたのであった。

思いついた手段（後書き）

次話ではセラール伯爵家の人々について述べたいと思います。
サラ嬢は少しばかり退出。

伯爵家の人々（前書き）

お気に入り登録を下さった皆様、ありがとうございます。

伯爵家の人々

セラール伯爵家の人間は、明るい色彩を持つ人間の多いこの王国の貴族の中では少数派の黒目黒髪の人間ばかりだ。

時偶、セラールの家名を名乗ってはいても、明るい色彩を持つ人間がいれば「ああ、この人はセラールの家に嫁いだ（あるいは婿入りした）のだな」と即座にバレる程、セラールの血を引く者は黒目黒髪を持って生まれて来た。

そして伯爵家の者達も少数派である自らの暗い色彩を貶める事はせず、寧ろ黒目黒髪で生まれて来た事に誇りを持つ。

その誇りは、セラールの者が成人する際、一族の者から認められれば『黒』を冠した自らの“名”を堂々と名乗る事を許されるという事例からも明らかだった。

＊ ＊ ＊ ＊

「――少々、お時間を頂けますか？ お父様、お兄様」

一家団欒の時間。

夕餉の席で、エステルは銀の匙を置くと、目の前で優雅に食後のパンナコッタに舌鼓を打つ家族達へと声をかけた。

「なんだい、エステル？ 何を改まっているんだい？」

目を細め、柔和な微笑みで答えたのは次期当主であるエステルの兄・イサク。

伯爵家の証とも言える黒髪を白のリボンで後ろに括り、朔の夜を思わせる黒い瞳の青年である。

「まあまあ。その話にお母様は必要ないのかしらん？」

おっとりとして、息子そっくりな優しい気な微笑みを浮かべ、悲しそうに頬に手を当てたのはエステル之母であり、伯爵夫人であるマリア。華やかに結い上げられた赤茶色の髪に深い翠玉の瞳。

彼女は他所からセラール伯爵家に嫁いで来たため、その身に黒を宿していない。

「……………それで？ 何の用だ、我が娘よ」

重厚な響きを宿すゆったりとした抑揚の声で応じたのは、伯爵家当主であり、父のアベル。

切れ長の少々吊り上がり気味の漆黒の瞳は真っ直ぐに、娘の姿を映していた。

「申し訳ありません、お母様。今回の事は『黒』に関わる事でして」「あら。それなら仕方ないわね」

軽く頭を下げて謝罪した娘に、母は目を何度も瞬かせる。同時にそれを聞いた兄と父親が、揃って視線を陰しくした。

「……………心意気は立派だけどね。お前にはまだ、早いのでは？」
「イサクの言う通りだ。——すまん、マリア。少し下がってはくれないか？」

「もう。折角面白くなって来たというのに。こういう時、いっつもわたくし私は仲間はずれなのだから」

口では不満を口にしながらも、マリアは逆らう事無く召使い達を連れて部屋から退出する。

母が出て行き、自分達の他には誰もいなかった室内で、再びエステルが口を開いた。

「親友のサラが面白い話を持って来てくれましたの。聞いて頂けます？ お父様、お兄様？」

「ふうん。サラちゃんがねえ……。ボクの想像通りなら、中々愉快的事になりそうだね」

「そうだな。話してみると良い、エステル」

—— エステルの言葉に、兄は口角を持ち上げ、父は寧猛に笑ってみせた。

伯爵家の人々（後書き）

お気づきの方はおられるでしょうか？

実はこの作品の登場人物の名前は、とある書物に登場する人物から取られています。

『黒』

セラール伯爵家に属する人々は、良く言えば個性的、悪く言えば奇人変人と呼ばれる者達である。

それ故に、と言っているのかは分からないが、この一族には代々伝わる特殊な伝統が存在する。

——その伝統は一族の間で『黒』と呼ばれている。

＊ ＊ ＊ ＊

「エステル。キミは今年で幾つになったけ？」

「十七です、お兄様」

「ふうん。十七か……。ボクが『黒』の儀式を受けたのは今から三年前。丁度十九の時だったけど？」

「何が言いたいのですか、お兄様」

「正直言って、早いと思うよ」

ニコニコと微笑みながら、聞いていて嬉しくない事をさり、と口にするこの兄は本当に性格が悪い。

貴族の中でも、この兄がさり気なく口にする厭味にも気付かない者が多い程、あまりにも自然に毒を吐くのだ。

「気の毒なサラちゃんの話はボクの耳にも届いているよ。その上で聞くけど、エステル、キミは彼女に協力する気かい？」

「そのつもりですが、お兄様」

「意思が固い事。父上、どうします？」

腕組みをして、黙考する様に目を瞑っていた父にイサクが声をかける。

「エステル」

「はい、お父様」

「お前は『黒』の重要さを分かっておらずにその事を口に出しているのならば、今すぐこの話は無かった事にしなさい。『黒』を冠するための儀式はセラールレの人間の一生を左右する程、大事な物なのだから」

「だからこそ、です。お父様」

にこり、とエステルが微笑む。

常日頃から眠たそうな顔をしている彼女が、一度微笑みを浮かべるとそれだけで周囲は彼女から目を離せなくなる程の引力を発する。

「サラにとっても、今回の事は彼女の一生を左右する程大事な事。その彼女を助けると私は言いました」

普段は完璧な淑女として猫を被っていても、あの金の髪に春の空の瞳をもつ親友は根はとも真っ直ぐだ。

そんな親友が長年想い続けた相手ではなく、別の相手と無理に結婚しなければならぬ事態に陥っている。

ここで自分が彼女を見捨てたら、親友は自らの心と周囲の期待、そして望まずに得た地位に翻弄される一生を送る事となるだろう。

「サラの今後の人生を賭けた戦いです。その協力者である私も、同じだけの物を懸けなければ彼女に対しても失礼でしょう。自分だけが安全な場所にいるなんて」

善くも悪くも『黒』はセラールレの人間の一生を左右する。

これで本当の一蓮托生だ。

妖艶に笑ってみせたエステルに、イサクは口を噤み、伯爵は重々しい溜め息を吐いた。

『黒』（後書き）

『黒』についての説明は次の話で。
サウ嬢、再び登場です。

一蓮托生＜前編＞

「『黒』の儀式を受ける事にしたって聞いたわ！ 何を考えているの、エステル！？」

翌朝、部屋に入って来て早々、叫んだのはサラであった。

よっぽど急いで来たのであろう。

普段の猫かぶりはどこにいったのか、普段は綺麗に纏められている月光を紡いだ様な金の髪は所々乱れている。淑女にあるまじき振る舞いだ。

「随分と、朝早いね。――それより、外に音が聞こえるから早く扉閉めてくれない？」

やはり寝間着のまま親友を迎えたエステルが、寝台の上で転がりながら指示する。

色々と言いたい事があった様だったが、サラは黙ってそれに従った。

「……それで？ 誰から聞いたの？」

「イサク兄さまからよ」

三歳の頃からの付き合いだからか、サラはエステルの兄であるイサクの事を兄と呼ぶ。

イサクの方も、サラの事をもう一人の妹の様に昔から可愛がっていたのだが、面倒な真似を。

「兄様も余計な事をしてくださって……」

令嬢にあるまじき事に、エステルが舌打するが生憎此処にはサラ
しかない。

普段であれば注意する立場のサラであるが、今回ばかりはそこま
で気が回らなかった様だ。

「ねえ、お願いだから考え直してよ、エステル。『黒』の儀式はセ
ラーレの家に属する者として最も大事な物でしょう？ 本来ならば
十七で受けられる様な簡単な儀式ではない筈よ」

「……サラ。『黒』『黒』と言っているけど、それがどんな物なの
か、あんたはどこまで知っているの？」

「詳しくは知らないけど、セラーレの人間の一生を左右する程大事
な儀式なんでしょう？ 間違っている？」

恐る恐る、といった風情の親友の言葉に、エステルが黙考する。
春の空を映した瞳が不安そうにエステルの姿を見つめている。

「本当は、外部の人間に教える事は良くはないんだけど。この際は
……まあ仕方ないか」

考え込んだのも一瞬の事。

あつさりと一族の秘事に関わる事への判断を下し、寝台に転がっ
たままエステルはサラを何を考えているのか分からない無機質な眼
差しで見つめ返す。

「大変だ、重要だ、とかいっているけど、そんなに鬼気迫る物じゃ
ないよ。『黒』は」

ごろり、と転がって、天井を仰ぐ。

「簡単にいえば、セラール流の“成人の儀式”だよ」
「“成人の儀式”……それが『黒』の儀式なの？」

幼子の様にエステルと言葉を繰り返したサラを、天井を仰いだまま横目で見やる。

ほどけた金色の髪がはらり、と落ちた。

「セラールの一族にとって自らの黒目黒髪を誇りの証。私の兄と父の呼び名をあんたも一度は聞いた事があるでしょう？」

「叔父さまは『黒獅子』で、イサク兄さまは『黒狐』でしょう？
それにエステルが『黒猫』」

「私の『黒猫』は単なる渾名。^{あだな}呼び名じゃないの」

微かな衣擦れの音を立てながら、サラが寝台に近付く。

右手で寝台を叩いて、そこに座るよう促した。

「『黒』とは一族の者が成人するための、セラールの家のみに伝わる風習。黒目黒髪のセラールの人間が適齢期に近付いたら、一族の年長者からそれぞれ“試練”が与えられる。それを見事制し、成し遂げた者は周囲から大人として認められるの」

「そうなんだ、なんか拍子抜けしたわ。って事は、イサク兄さまや叔父様の呼び名は、二人がセラールの人間として成人した事を示しているの？」

「まあ、そう言う事かな？」

——はて、とサラが首を傾げる。

「でもそれなら、今回の王子殿下の求婚とエステルの成人式がどう関わってくるの？」

『————それにはボクが答えようか』

扉の向こうから響いて来た聞き覚えのある声に、エステルは忌々し気に寝台の上に起き上がって、再度舌打した。

一蓮托生＜中編＞

「やあ。朝早くからわざわざ来てもらって済まないね、サラちゃん。いつも愚妹がお世話になってるよ」

「朝早くから淑女の部屋に押し掛けて何を言っているんだ、愚兄。うさんくさい顔で笑ってないでとっとと出て行け」

自称・淑女な妹の言葉に、兄のイサクは飄々と笑う。

兄妹の毒の吐き合いに巻き込まれたサラが、おろおろと睨み合う二人へと視線を移す。

「やあ、エステル。今日も今日とて朝っぱらからご機嫌斜めだね。昨日の晩はあんなに素敵だったのに」

「余計な事言ってるで、さっさと退散しやがれ『黒狐』。悪いがあんたはお呼びじゃない」

淑女としての言葉遣いもかなぐり捨てて、エステルが毛並みを逆立てた猫の様に唸り声を上げる。

サラが見守る中、イサクは乾いた笑声を上げた。

「やれやれ。エステル、キミは昔から自分に都合が悪い事があると途端に口が悪くなる癖は変わらないよね」

「はっ！ 何を嘯く、愚兄。^{うそぶ}都合の悪い事なんかある訳ない」「本当に？」

イサクの目が狡猾な光を宿す。

突き刺す様な口調に、僅かにエステルの肩が震えた。

「では聞くけど、キミは親友のサラちゃんに嘘をつくんだ？」

「え……?」

「嘘なんかついてない!!」

先程までの気怠気な雰囲気は綺麗に消え失せ、寝台の上に起き上がったエステルが一喝する。

豹変した親友にサラが肩をびくり、と揺らすが、一喝を浴びた方の兄はますます笑みを深めたただけだ。

「そうだね。厳密に言えばキミは“嘘”はついてない。……言っていない事はあるけどね」

「どういう事、エステル?」

押し黙ったエステルが変わって、イサクが答えた。

「『黒』が単なる成人の儀式だって? 笑わせる。友人を困らせたくなかったキミの気持ちは、まあ……分からなくてもないけど、随分と残酷な友情だ」

母・マリアに似た、優し気な容貌が奇妙に歪む。一瞬だけ、イサクを獰猛な気配が包んだ。

「確かに『黒』は一族の成人式としての役割も持つ。でもね、サラちゃん」

春の空の瞳を大きく見開き、声もでない少女にイサクが何処か獣めいた微笑みを向けた。

「〈試練〉に成功すれば、ボク達は正式にセラールの人間として認められ、有事の際には意見を述べる事も許される様になる。人間として考えうる範囲での自由が与えられる。例えば、新しく事業を始

めたり、はたまた国を出て好きな所に行って、他所の国に仕える事だって咎められはしない」

普通の貴族であれば、生まれた王国の中で一生を過ごす事が当たり前とされ一族の人間に外へ行く事を勧めない風潮が強い中、国外へ行く事を許すセラール伯爵家は異端であった。

でもね、とイサクが笑う。

「人間としての最大の自由が認められる一方で、もしも＜試験＞を合格出来なかったセラールの人間はどうなると思うかい？」

「どうなるの、ですか？」

「……一切合切、人間としての自由と権利を剥奪され、セラールの人形にされる」

震えるサラの声に応じたのは、エステルであった。

先程までの威勢はどこにいったのやら、寝台の上に再び寝っ転がって不貞寝していた。

「それって、過激すぎるんじゃないの？ その、成人の儀式としては」

「この習わしを作った初代が、無能嫌いの苛烈な人間だったからね。自分の子孫と言えど、この程度の＜試験＞をくぐり抜けられない程度の人間ならいらなんて事らしい」

それを実際に実行しているボク達と言うのもなんだけどね、とイサクが苦笑する。

「＜試験＞は年長者から与えられる物と、＜試験＞を受ける者が自ら選択するタイプと二つある。その愚妹が『黒』を申請する際に

選んだく試練>は、サラちゃん、キミの婚約破棄だ」

「……！」

むっすり、と不機嫌そうなエステルを見やるが、結局サラは何も言えずに押し黙る。

「王族の面子を潰さずに王族からの求婚を断るんだ。並大抵の事じゃ出来ないよね？ 他人事として言わせてもらうなら、正にく試練>に相応しい課題でもあるよ」

「うるさいぞ、愚兄。余計な事ばかり教えやがって……」

くっくく、と愉快そうに喉の奥で笑声を立てる兄を睨みながら、エステルがふてくされる。

「そういうわけだ、サラちゃん。昨晚、エステルの申し出は一族の年長者の審議を経て、エステル・セラールのく試練>として正式に認められた。もしキミが今後王子に心変わりしたとしても、その愚妹はキミと王子の婚約話を全力で壊しにかかるから安心しなよ」

好き勝手言いながらイサクが部屋から出て行く。

その後姿に向かってエステルが枕を投げつけるが、寸前で扉を閉められてしまった。

「全く。どこから聞いていたのやら。我が兄ながら性格の悪い……」

寝台から抜け出して床に落ちた枕を拾う。

その背をサラが物言いた気な視線で見つめていた。

一蓮托生＜中編＞（後書き）

なんかかなりシリアスになりました。

一蓮托生く後編>

サラ・フィオーレには忘れられない思い出がある。

まだ物心ついて間もない頃、三歳からの親友にして幼馴染のエステルと二人、童話を読んでいた時の事。

悪い魔法にかけられ百年の眠りに就いたお姫様を、王子が助けにいくという幸せな結末の恋物語。

めでたしめでたし、で終わった物語を読み終えたエステルの言った一言は、幼いサラに多大な影響を与えた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「全く……。イサク兄様も余計な事ばかりしてくださって……」

「……………エステル」

「こっちは起き抜けでまだ頭もはっきりしないのに……」

「……………エステル」

「ふわ……。それにしても、眠い」

「エステル!!」

さっきまでの剣幕をどこに捨て置いたのか、眠たそうなとろり、とした目でベッドに潜り込もうとするエステルにサラが大声を上げた。

焦点の合わさっていない茫洋な眼差しがサラを見つめ返す。

「————嘘つき。ただの成人式だなんて言って……。どうして誤摩化そうとしたの」

「あれは……イサク兄様の質の悪い冗談だよ」

「馬鹿にしないでよ、エステル! 確かに私は助けて欲しいとは頼

んだけどっ!!」

サラの中で悔しさとか惨めさとか、色々な感情が混ざりあって、どうしようもない気分になる。

「こんなっ……! たかだが私がされた求婚ごときに、なんでこんな大事な事を……!」

自分でも何を言いたいのか、分からなくなって、ぼろぼろと涙がこぼれる。

大きな溜め息の音がして、握りしめていた右手を優しく取られた。

「第一、意味分かんないっ! 昔からエステルは私に言っていたじやないっ!! こっ、恋だの愛だのくだらない、って! そーいうのは、一時の気の迷いだとか何とかっ!」

どんなに素敵な恋物語を読んでも、ロマンチックな恋愛を題材にした御芝居を観劇しても、この黒目黒髪の親友はいつもつまらなさそうにしていた。

「さっ、散々、私の恋の事も馬鹿にして来たのにつ、なんでいまさらここまでするのっ!? わ、訳分かんないよっ!!」

父にも母にも内緒にしているサラの好きな人。

知っているのは話した相手はエステルだけで、それなのにこの親友は止めもしなかったけど、応援もしてくれなかった。

「ひっく、ひっく。エ、エステルのぼがあ……。こ、恋なんか一時的錯覚にしか過ぎないとか、偉そうにいつでいだぐせに……」

わんわん、と身も蓋も無く泣きわめくサラの右手を優しく引っ張って、ベッドの上に座らせる。

二人分の体重を受け、ベッドが柔らかく弾んだ。

「まあ……。正直、今でもそう思っているよ」

「な、なら、なんでえ」

「——見て見たくなったから」

「ふえ？」

真摯な輝きを宿した夜空の瞳が、春の空の瞳を射抜く。

『黒猫令嬢』はゆったりとした柔らかな微笑みを浮かべた。

「私が散々馬鹿にして来た恋愛に、いつでもあんたは一生懸命だったから」

この泣き虫な親友は、自分が取るにたらぬ事と見放していた恋にいつも一生懸命で。

ただ一人を見据えて、相手に声をかけられるのを待つのではなく、ひたすら自分自身を磨き続けて。

——そして、その努力の結晶が『金の妖精姫』サラ・フィオリレ。

一国の王子でさえ魅了した完璧な淑女へと、彼女は立派に変身したみせた。

「だから、見て見たくなった。あんたが本当に、想いを貫く事が出来るのかどうか」

乾き切った自分とは違い、生き生きと花を咲かせた親友。

散々馬鹿にしてはきたけれど、今では立派な淑女に変身してみせ

た親友が想いを成就する場面をいつか目にするのが楽しみだった。

「ほ、本当に……？」

「ま。正直あんたの片想いの相手はどうかと思ってはいるけど……」

途端、再び涙を流し始めた親友の涙をそっと拭う。

「それにあんた、そこまで器用じゃないでしょう？　ずっと好きだった相手を諦めて、どうでも良い相手と結婚して、欲しくもない地位や名誉、余計な嫉妬に苛まれる一生を送れるほど強くないし」

この国の王太子妃、引いては未来の国王妃となって得られる物は沢山ある。

女性としての最大の栄誉や豪華なドレスで着飾れる一生、きらびやかな人々にかしずかれ欲しい物を手に入れる事の出来る権力。

——それらを補ってあまりある程の人々の負の感情も。

ここでサラが王子に好意を持っていたのであれば、それらに打ち勝つ事も可能だろうが、しかしながら現実はそうではない。

「この勝負に負けたら、あんたは好きでもない相手と結婚して、欲しくもない重責を背負わされる羽目になる。私はそんなあんたに協力すると言った」

エステルの迫力に押された様に、サラがコクリと頷く。

「あんたの一生を賭けた戦いよ。それに値する物を私も懸けなきや失礼じゃない」

自分だけ安全な場所において、そのくせ助言だけを寄越すなど、エ

ステルの誇りが許さない。

——協力すると宣言したならば、自分もサラと同じ土俵に立つべきだ。

都合が悪くなってから、他人事だと言って逃げ出す事は絶対にしない。

「良い事？　これであんたと私は文字通り一蓮托生。私だってセラレの人形として一生を送る羽目に陥るのは御免被るわ。何が何でも、この求婚断ってみせるわよ」

「……………うん。ありがとう、エステル」

————親友の頼りがいのある宣言を受け、漸くサラは笑みを浮かべた。

一蓮托生＜後編＞（後書き）

取り敢えず、第一部は完結。
第二部から本格的に動き出します。

幕間・伯爵家の人々

「―――それでは、昨夜申請のあったエステル嬢の『黒』の<試練>はサラ・フィオーレ伯爵令嬢と王太子殿下との婚約破棄という事で確定じゃな？ 異論はあるかの？」

薄暗い部屋の中、重厚な檜作りの円卓に五人の人影がある。

身なりも格好も、性別も様々な人間達であったが彼らは全員一つの共通点を持っていた。

「構いませんわ」

まず最初に言い放ったのは、官能的な響きの女の声。

「了承した」

続いたのは冷徹な印象を聞く者に与える男の声。

「ふふ。あの子がどこまでやれるのか、とっても楽しみだね」

愉快そうに呟いたのは、何処か毒のある青年の声。

「……致し方あるまい」

最後に、苦味の混じった声が渋々と同意する。

「諸卿に異存は無い様だな。では、ここに五卿の名の下に『黒』の儀式の開始を承認する」

五人の人影の中で最初に口を開いた、年老いた声が重々しく呟くと、残りの四人が一斉に頷いた。

彼らが頷いた途端、どこか重たい沈黙が室内を漂う。

「それにしても、恋愛をあんなに嫌っていたエステルちゃんがねえ……」

そんな空気を払拭する様に、女の声が呟く。

他の四人が苦笑する雰囲気、空気をさざめかせた。

「ボクとしても意外でしたよ、叔母上。あの怠惰で面倒くさがりやな妹がこんな事を申請するなんて」

「イサク……」

毒を孕んだ軽やかな声が言い放つと、苦味の混じった声が渋い声へと変わる。

「それにしても、よくもお前達が受理したものだな。何故止めなかった……？」

少しばかり不思議そうに、伶俐な声が訊ねかける。

答えたのは、女の声だった。

「あら。あたくしにしてみればさすがは我が姪御と感心こそすれ、止める様な野暮な真似は致しませんわ。殿方はお疑いでしょうけど、女の友情は脆くもあります、強固な物は殿方に引けを取りませんのよ？」

「それは女であるお前の意見なのか？ 『黒蝶』よ」

「当然でございますわ、当主様」

女の声がしっとりとした艶を増す。

「『黒狐』、お前でも十九の時に受けた『黒』の儀式であるというのにのう。エステル嬢は何を考えているのやら」

年老いた声が悄然と溜め息を吐く。

それを打ち破る様に『黒狐』は、からからと笑声を上げた。

「さあ。案外何も考えていないかもしれませんねえ。なにせ、気まぐれな『黒猫令嬢』でございますから」

「やはり、早すぎたのであろうか……」

「らしくないぞ『黒獅子』。戦場でのお前はどこにいった？」

『黒狐』と違い、沈んだ空気をそのまま声に移した様な苦々しい声の独り言を冷淡な声が窘める。

「動機が何であれ、エステルは道を選んだ。『黒』の儀に成功して見事『黒』の称号を冠するのか、はたまたく試練>に破れセラールの人形となるかは、全てあの娘の力量次第」

「ほっほ。『黒蛇』の言う通りじゃて。戦の折りは無敵を誇る『黒獅子』も、愛娘には弱いようじゃな」

年老いた声が好好爺然と笑う。

————それを最後に、黒い目と黒い髪と言う共通点を持つセラールの一族の人々は、沈黙したのであった。

計画は現実的に（前書き）

第二部に入ります。

計画は現実的に

サラ・フィオーレが王子に求婚された舞踏会から、三日目。

エステルが親族から『黒』の儀式の許可を受けてからは、二日目の日。

一蓮托生となった少女達は、エステルの生家・セラーレ伯爵家の内庭の四阿にて額を付き合わせていた。

＊ ＊ ＊

「ああ……。どうしよう、どうしよう。もうこれ以上、王子へのお返事を引き延ばせない……」

「うるさい。こっちは本を読んでいるから暫く黙ってて」

白亜の大理石で作られ、柱の至る所に青々とした蔓草の絡み付いた瀟洒な四阿の中。

月光を紡いだ様な波打つ金の髪に春の空と同じ色の瞳を持つ少女はブルブルと震え、その傍らの濡れ羽色の黒髪に夜空の瞳を持つ少女は淡々と本のページを捲っていた。

「う、うるさいっ、って！ ひどいわ、エステル！！」

「騒ぐ暇があったら、本でも読んでなさい」

純白のテーブルの上に積まれた本の山から一冊取り出すと、サラの方へと放る。

突然放られたのにも関わらず、投げつけられたサラの方は、それを危なげなく受け止めてみせた。

「もう、エステル。私だったから良かったものの、他の貴族のお姫様達にこんな乱暴な真似をしてはダメよ」

「……ふわぁ」

つん、と桃色の唇を尖らせてサラが窘めるが、退屈そうにエステルは生欠伸する。

そうしてパラパラと捲っていた本を脇に置くと、今度は右手を伸ばして薄い冊子を引っ張り出した。

「ねえ、エステル。これからどうするのか、教えてくれない？」

「——ん。取り敢えず、第一の目標は正式な婚約を先延ばしにする」

『結婚のススメ』と銘打たれた薄い冊子を退屈そうに捲りながら、エステルは答える。

「あんたが舞踏会の夜に返事をしなかったから、今の所あんたと王子との間に正式な婚約は結ばれていない。それは分かる？」

「う、うん」

こくこく、と必死にサラが頭を振る。

エステルは薄い冊子を横に放ると、今度は『婚約前の淑女の嗜み』というタイトルの分厚い本を開いた。

「正式に婚約が結ばれていない、という現状は私達に取って非常に有利な状況よ。周囲がいくらあんたを王太子の婚約者として扱ったとしてもね」

『正しい求婚の受け方について』と書かれた章を飛ばし、ページを更に進めるエステルの横で、サラがぎゅっと拳を握りしめていた。

「取り敢えず、第一にすべき事は何か何でも正式な婚約を結ばせない事。もし、されでもしたら、その時点で私達はかなり困った事になるからね」

「で、でも……。今だってギリギリなのに、これ以上延ばすだなんて……」

弱音を吐いたサラに、エステルは本へと落していた視線を持ち上げ、春の空の瞳と視線を合わせた。

「そうだね。——だからひとまず、あんたは王子に会いに行きなさい」

「へ？」

間抜けな顔をしてエステルを見返すサラに、エステルはあくどいとしか評しようのない笑みを浮かべてみせた。

「こういう時に使える、とっておきの台詞があるじゃない」

「は？」

何かなんだか分からないサラに、エステルは渡した本を見る様に指示する。

手の中の本のしおりが付けられた箇所を開いて、赤い線が引いてあった行を目にして、サラの瞳に理解した色が浮かんだ。

「その台詞を、王子の前で言いなさい。上手くいけば、時間を引き延ばす事が出来るわ」

———そうして微笑むエステルの顔は、やっぱりあくどかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0962y/>

黒猫令嬢の気まぐれ

2011年11月9日22時07分発行